

Tuomas Rasimus, Troels Engberg-Pedersen and Ismo Dunderberg (ed.)

*Stoicism in Early Christianity*

Baker Academic, 2010.

樋 笠 勝 士

本書は、T. Rasimus（ヘルシンキ大学聖書学部及びラヴァール大学古代研究所リサーチフェロー）、T. E.-Pedersen（コペンハーゲン大学神学部教授）、I. Dunderberg（ヘルシンキ大学教授）の3人の編者による論文集である。タイトルの「初期」とは、盛期教父哲学以前の1～2世紀の時期を指し、対象となる文献は、聖書テキスト、正典外テキスト、護教家テキスト等である。従来、ストア主義の伝播や影響に関連してキリスト教思想を研究する関心の多くは、教父哲学研究のうちにあった。それはキリスト教思想の哲学的な理論構築への実質的影響を重んじる立場からのものであったが、本書は、原始キリスト教思想の成立時に遡及してストア派思想の影響を見いだそうとする、或いはストア派思想と比較する、という、いわばパラレル・テキスト的手法を用いたものであり、ヘレニズム的・聖書学的・文献学的な立場に基づいている。

以下13編の論文が扱う領域は、思想の全体論に始まり、ストア派倫理学・自然学・賢者思想・グノーシス主義及び新プラトン主義に及ぶものである。

① T. E.-Pedersen 「場面の構成～古代哲学移行期におけるストア主義とプラトン主義」、② R. M. Thorsteinsson 「ロマ書におけるパウロ倫理学への鍵となるストア主義」、③ N. Huttunen 「パウロにストア派的な法はあるのか?」、④ S. K. Stowers 「マタイ伝における教師イエスとストア派倫理学」、⑤ H. W. Attridge 「『感情的な』イエスとストア派の伝統」、⑥ G. B.-Hansen 「感情的なイエス～第四福音書における反ストア主義?」、⑦ J. A. Harrill 「ストア派自然学、世界大火、そして第二ペトロ書における『学ばぬ者と定まらぬ者』の終末論的破滅」、⑧ J. T. Fitzgerald 「奴隷の取りあげ方におけるストア派と初期キリスト教徒」、⑨ N. Denzey 「獣との対面：ユスティノス、キリスト教の殉教、そして意志の自由」、

⑩ E. de Boer 「『マリア福音書』のストア派的読解：『マリア福音書』7.1～8.11における『質料』と『本性』の意味」、⑪ I. Dunderberg 「ヴァレンティノス派におけるストア派の伝統」、⑫ 大貫隆 「『ヨハネのアポクリュフォン』における、情念のストア派理論の批判的継承」、⑬ T. Rasmus 「新プラトン主義的三つ組『存在・生命・精神』におけるストア派的要素：2世紀の本来的なグノーシスの革新か？」。

以上を素描しておこう。まず、編者 E. Pedersen は、本書の扱う「初期」を「移行期」とする。つまり、時代の基調として、哲学各学派が各派の創始者には忠実でありつつも学派外テキストを採用することに寛容であること、ユダヤ教キリスト教作家もまたギリシャ・ローマ文献を素材として利用するなど思想交流的風土の中で、セネカ、エピクテトス、マルクス・アウレリウスなど後期ストア派が既にプラトン主義に対して懐柔的であったこと、さらに「初期」においては、支配的哲学が、ストア主義から、ストア主義への忠実性を残したままプラトン主義へと移行しつつあること等が認められるのである (①)。この「移行期」理解の下に「ロマ書」を見ると、確かにストア派的な術語使用 (12章：logikos) もあり、「善き人」の道德律は聴衆にとっても同時代のストア派の道德律にも聞こえたに違いない側面はあろう。パウロの言う愛 (agape) も聴衆にはセネカの相互愛 (amor mutuus) と重なって理解された可能性が高いのである。とはいえ、説く立場としてパウロを考えるならば、この類似はパウロからのメッセージを聴衆が発見する一般的な説得的手法に存しているとして、著者はその効用を強調する (②)。同様に、「第一コリント書」7にみられる「神の法」についても、明らかに、宇宙の法を神と同一視するストア派 (エピクテトス) と一致するし、また「ロマ書」1の道德律 («神の定め») も同様である (③)。福音書についても、例えば「マタイ伝」の著者が教師イエスを描くことで (例えば5章の「完全」というストア派の概念、山上の垂訓等)、明解で非体系的な倫理学を構成する際に、ストア派の倫理学から多くを引きだすのも、ストア主義が当時支配的哲学であったからである (④)。平和的で超然としたイエスが感情を露わにする「ヨハネ伝」でも、セネカの表象理論を背景にした感情の位置づけが、「よき感情 (eupatheia)」の議論と共に形式的類似性をもって現れていると見ることができると (⑤)、「有徳なる苦悩」と「よき感情」とを結びつける点もフィロンやパウロで以ても跡づけられる (⑥)。

他方、自然科学的な領域では、ストア主義とキリスト教とが共有する視点として、ストア派の宇宙燃焼論が、「第二ペトロ書」にある「世界大火」に対して思想材料を提供し終末論的思想に至らしめたと考えられ (⑦)、また社会的な領域では、奴隷(制度)或いは従僕の観念の共有がある (⑧)。さらに「殉教」概念における比較考察から、「殉教」の動機が国家への反抗ではなく、「哲学者乃至剣闘士」としてのストア派的(賢者的)境地から来る自発的な死、すなわち真の自由の獲得を狙うものであることがユスティノスを通じて明らかにされる (⑨)。

グノーシス主義との関連については、その影響が取りざたされる2世紀の外典「マリア福音書」(コプト語テキストによる)では、同時代のアレキサンドリアのクレメンス等のストア主義的要素との比較により、避けられるべき悪とは、グノーシス主義が主張するような物質や物質との混合ではなく、ストア主義的な「自然に反する」ことであるとする論考 (⑩) は、ヘレニズムに対するストア主義の強い浸透力を伺わせるものである。同様に、キリスト教的グノーシス主義の最大派閥ヴァレンティノス派においても、ストア派の影響が、 pneuma や四元素、パトスの癒し、道徳的前進 (prokope)、実体を保存する混合 (krasis) 等の点において見られるとする編者 Dunderberg の論考 (⑪) も、ヘレニズム文書を読解するための新たな視点を提供している。加えて、「ヨハネのアポクリュフォン」を分析的に解釈しストア主義の感情論との連関を見る大貫論文は、かかる文書が、ストア主義のパトス根絶主義に共感しつつも、ラディカルな主知主義に反対していたとする繊細な結論を導いている点で、ヘレニズム思想の複雑な混淆性を浮かび上がらせたと言える (⑫)。

最後に、編者 Rasimus は、新プラトン主義者ポリフュリオスがストア主義に基づくと見た P. Hadot の研究成果に沿って、ポリフュリオスにおける「存在・生命・精神」の三つ組の理解においても、「ヨハネのアポクリュフォン」などのグノーシス主義的展開の文脈の下におくのが一層説明可能であるとする主張を展開し、「移行期」としての「初期」の末期段階の思想状況を、多様なヘレニズム文献を比較検証する仕方では、本書を締めくくっている (⑬)。

総じて、本論文集は、聖書の正典外典その他の原始キリスト教関係文献を、グノーシス主義やストア主義及びプラトニズムの伝統を含むヘレニズム思想を背景にしたテキストとしてとらえ、そこに相似性を客観的に読み解く姿勢の下、諸学派の複層的混合性の意義を唱える点で、論集としての目的を全うしていると言っ

てよい。確かに「比較」や、そこで主張される「近似」「類似」については、蓋然性に留まり、その「影響」については論証が難しいことは明らかである。とはいえ、その手法は、我々が既知っているヘレニズム期の混淆性という理解に、従来とは異なるストア主義に特化した解釈による先端的視点や、詳細且つ分析的な文献解読の実証性を与えており、教父哲学前夜の思想状況について多くの意義ある知見をもたらしていることは否めない。評者としては、この点を評価しておきたい。

---

SZÉCSI József (szerk.)

*Keresztény – Zsidó Teológiai Évkönyv 2012*

(セーチ・ヨージェフ 〈編〉『キリスト教—ユダヤ教 神学年報 2012』)

Keresztény – Zsidó Társaság, Budapest, 2013, pp. 446, ISSN 1785-9581, A/5

---

秋 山 学

本書は、評者が2009年より参加しているハンガリーの「セゲド国際聖書学会」において毎年お目にかかるセーチ・ヨージェフ氏により、氏が事務局長を務める「(ハンガリー・)キリスト教—ユダヤ教協会」から、2001年以降年報のかたちで発刊されている出版物である。今回取り上げるのは、発行年の関係でこの年報の当巻ということになるが、本評においては、セーチ氏の学術活動および同協会の活動を中心に紹介を行うことにしたい。

セーチ氏は1948年、ハンガリー南部の中心都市セゲドに生まれ、1972年から74年にかけて、ブダペシュトのローマ・カトリック神学アカデミー（社会主義体制下における神学部に対応）において神学学位を取得している（神学教授資格論文は「人間生命の尊厳——戦争と平和の神学」、博士論文は「パラグアイでの布教活動における教会と社会」）。あわせて、エトヴェシュ・ローラント大学で東洋学と古代東方言語を修得、その後国立ラビ養成機関・ユダヤ教大学（以下ユ大と略す；1877年設立）の研究生となり、次いで同機関の主任司書を務める。その間「キリスト教—一致友好協会」の中に「ヘブライ・ユダヤ教部会」を設け、